FIKŌ NEWS FLASH

(発行所)
横須賀市船越町
榮光学園新聞部
編集責任者

予定

六月二十日　創立記念祭
二十二日　休日
七月九日～十四日　学期末試験
十五日～十九日　スポーツ大会
二十日　終業式

最高裁長官本校で講演

〝教育には強い信念を〟

◇五月三十日に開かれた榮光会総会は、以前から予定されていた通り、田中最高裁長官をお招きして、教育についての御講演をねがった。先生は文相、東大教授を歴任◇

◇官をお招きして、教育についての御講演をねがった。先生は文相、東大教授を歴任◇

◇されたお教育界の権威者でも居られるので、教育が社会問題としてだけでなく、政治◇

◇的にも重要な点と考えられている現在、その御講演は真に意義深いものであった。◇

フォス校長に紹介された田中長官は、戦前戦後を通じて教育の根幹がしっかりしていなかったことを指摘され、今後の教育には強い信念が必要であることを特に強調された。講演の大要は次の通り。

「最高裁判所と教育と云うことは何等の関係もないように見えるが非常に関係は深い。裁判所と云うものは遠くなった社会の病気をなおすのだが、教育も又社会の人々を健全な人間にするので、共に医者の役目をし、国家には無くてはならない基礎となるものだ。又裁判所に於ける長官はいくら上に居ても名裁判所が行う裁判を相撲することは出来ない。と同様に教育でも文部大臣が各校、公立でも私立でも、その学校の教育で先生が教えることを命令したり指揮したりすることは望めない。それ等はいずれも担当者が良心的にやると云うことを認めているからだ。これでだいたい教育と裁判がかなり関係のあるものだと云うことが分るが、きっと認ずべき問題は「新憲法に於ける教育」と云うことだが。

日本では学を知って居る者が国民の九十七・八％をしめていて、世界にもあまりない文化国である。といって日本の教育が優れたものであると云うことは出来ない。特に戦前に於ける教育は精神的な面が非常に欠けていた。戦前には教育勅語と云うものがあって、それは教育の根本となることが書かれていたので、全ての学校教育はそれに基づいて行われた。しかし戦後になって勅語と云うものが軍国主義的な教育の元となったのだからと考えられ廃止された。その代りに教育は戦前よりも非常に重く見られるようになり、憲法にも重大な項目として教条取り入れられ、教育基本法と云う専門の法律まで出来ている。この教育界の大変化は喜ぶべきことではあるが、勅語と云うものがミリタリズムに基づいたものであるから廃止されたのだと云う理由には大きな疑問がある。教育勅語には一例をとってみれば「国家を救う為には自己をも犠牲にする。」と云うようなことが書いてある。これは今の世界になって立派に通用する精神だと思いてあるこの学校は、人格の形成と云うことを目的とする教育の根命を最もよくはたしている学校だ。

このように考えて来ると教育も哲学と同様に人類不滅の精神すなわち自然に基づくものだ。しかしそれを受け入れる方が、勅語は天皇陛下が宣言されたのだからその通りでなければならないのだと云う考えで教育を行っていたので、一度勅語が廃止されるとさてどうやっていいか解らないと云うように教育界のほとんどが教育する自信を失ってしまった。すなわち教育者は、上から命令されることのみに従って、自分も信ずると云う強い信念を持っていなかった。この状態は戦前でもまだまだ強い信念には基づいていないようだ。

それに引き代え、イエズス会の修道者は、人間は生まれながらに罪深い人類不滅の精神すなわち自然に基づくものだ。しかし自然法と云うものは人間性から発するものであり、人間性は人に従って見方が異うからその根底に宗教が考えられる。その見方は各自自由である。しかしただ一つ云えることは、全てのものはそれ以上のものがあるからこそ価値があるのであって、決してそれ以下のものの中でその真価を見出す事は出来ない。つまり自然界の全てのものは超自然に通ずるからこそ価値があるのだ。

校長先生厳父御死去

本校校長先生のお父様グスタフ・フォス氏は五月二日（ドイツ時間）脳溢血の為死去された。

この旨を電報で御受けとられた校長先生は十日の朝礼で報ず感激を述べられ、先生御代表の西三郎君から弔辞を受けられた。

お父様は一八八七年ドイツにお生まれになり第一次大戦の時は海軍に従軍され、後鉱山技師として一九四五年まで働かれておられたがそれからは校長先生の妹さんと一緒に静かな生活を送って居られた。

校長先生が日本へ来られた年、昭和八年の九月以来何度か訪問されながら遂に会う事が出来なかった事が校長先生及びお父様の唯一の心残りの事であった。

尚五月十四日には校長先生、シュトルテ先生、ウルフ先生に送る壮厳ミサが行われたが、榮光会及び榮光会長、生徒容姿の花束の中にかこまれたお父様の御顔を眺められる校長先生の眼には、心なしか涙が光っていたようである。

アカデミア行わる

聖母の月の最後を飾るアカデミアは、五月二十九日（土）午後、講堂二階合併教室で、信者多数を集めて行なわれた。

プログラムは、高一　君の指揮する信者有志の聖歌合唱に始まり、世界、特に西欧に於ける聖母への崇敬が、いかなる形で変われて来たかを、歴史を辿って高三　君の解説で、ついで、高三　君君が語り、ついで、高三　君の聖歌、マリアを讃える歌のレコード鑑賞のあと、中三　君の「聖母頌歌」の朗読があった。

かわって当真先生が、フラ・アンジェリコの信仰について、彼の絵画を通じてお話になった。高一　君の聖母についての作文朗読の後、クリュエル神父様から有意義なお話を聞いて、再び合唱「さつきのきさい」をもって、アカデミアの幕を閉じた。

『生徒手帳』発行か

今迄本校には校則などを記した小冊子が出来ていなかったが、生徒、父兄の間にこのようなものの発行を望む声がおこったので、今度他校にならい生徒手帖を作ることになった。

生徒手帖は毎年発行され、カレンダー式の手帖でメモなどが記せるようになっている。

具体案はまだ出来ていないが、中に校則、榮光精神の実践要領、勉学の方法、注意、部活動原則などを入れ、榮光精神を感じるようにお祈りを教えてくれました。

この手帖の編集には、シュトルテ先生を中心とし、他の先生方や生徒が協力する。

なお、これは今年の十二月クリスマスの前頃発行される予定である。

英語新教科書発行

先頃発行された English-Home I、IIに続いて、今度はIIIが発行された。これは今迄のOurHome のIIIとIIIの一部が収められており、中三が今年の五月から使っている。この本は前の二冊が緑、赤だったのに対して、青表紙である。

追伸

▼先頃校長先生の御尊父が御死去された際、私達で、おくやみとして花輪を贈ることとなり、そのための募金を行なったが、募金総額六千円のうち、中学生は四千円、高校生からは一千円であった。高生は校長先生に中学生よりずっと長い間お世話になっていたのに、なぜ募金成績が中学のたった半分なのであろう。勿論、校長先生への感情がお金だけで決まるというわけではない。しかし、今度のような場合は、校長先生の御尊父にいさんがもむくいる絶好の機会ではなかろうか。高校生は、中学生よりも人数の少ないことは確かであるが、高校生である以上、中学生より小遣をたくさん貰っているはずである。少なくとも、高校と中学の募金総額が等しい位であるのではないか。高校生の一考を要する問題であろう。▼これから夏にかけて、学校の楽しい行事がたくさんある。しかしその中に夏祭りのないことは、いかにも、残念だ。スポーツ大会の最終日に、優勝チームの表彰式を兼ねてこれを行なう。又その時に定期試験でさんざん私達を苦しめた先生への御礼返しをすれば、きっと楽しい夏祭りが出来よう。金校生が一緒に遊ぶ機会が少なく、このため中一は高三の名前を知らないという状態であるが、この機会に お互の親密さを深めれば、榮光は一層家族的な学校になるであろう。

父の思い出

グスタフ・フォス

丁度高等学校を卒業する一年ばかり前の或る夏の夕方の事でした。私は縁側で涼風をやり、父は傍で食後の一服をおいしそうにすっていました。その時初めて私は自分の将来の計画について話したのです。私は父に司祭になりたいと打明けました。

この事が両親を驚かせる事はわかっていました。司祭になる事は家を離れ、親、兄弟から離れ、他人の為にのみ生きる生活に入る事になるからです。私の良い両親は私の最大の願を聞き入れてくれる丁度高等学校を卒業する一年ばかり前の或る夏の夕方の事でした。私は縁側で涼風をやり、父は傍で食後の一服をおいしそうにすっていました。その時初めて私は自分の将来の計画について話したのです。私は父に司祭になりたいと打明けました。

この事が両親を驚かせる事はわかっていました。司祭になる事は家を離れ、親、兄弟から離れ、他人の為にのみ生きる生活に入る事になるからです。私の良い両親は私の最大の願を聞き入れてくれる

父は黙っていました。長い間一言も言いませんでした。それは私にとっては何時間にも感ぜられました。私は何だか不安になって来ました。父にとって、まして母にとっては一層一人息子を手離す事がどんなに辛い事か、わかっていました。ですからそれ迄私の感そして計画を話さなかったのです。父は何と答えたでしょう。「そうか、お前は司祭になりたいのか。いい事だ。それを聞いて私もうれしい。だけどお前がいないとお母さんもお父さんもさみしいと思はわないか。そしてお前もさみしいだろう。まあ併しお前もそんな事は皆考えた上での事だろう。…」

私達は長いことその事を話し合いました。父はいつも私の良い相談相手で、たとえ、誕生祝にどのネクタイをして行くかというような、些細な事でも、父は、喜んで相談にのってくれました。私は父に何もかも話しました、まるで親友のように。又父は私のどんなかすかな心配事も喜びも良くわかってくれました。

太陽も沈み、肌寒くなった頃、私達はようやく腰を上げました。父は両手を私の肩の上に置いて「お前のしたい事をしなさい、何も心配する事はない、お母さんには私から話してあげよう」と言ってくれました。数日後母が私の計画を喜んで許してくれましたと、父も私と一緒に喜んでくれました。

私は卒業してイエズス会に入りました。

一年半後私は突然日本に行くよう命令されました。あまり急で準備するのに二時間しかありませんでした。その時は丁度オランダにいましたが、二、三日家に帰る機会がありました。父は何というだろう、私は汽車の中でもどれだけ心配でした。父は駅に私を迎えてくれました。私達はだまって握手をしました。父はタクシーに乗って初めて口をきりました。「お母さんにどって大変辛い事はわかるだろうね。併し私がよく勉強したから、お母さんも、もう大丈夫だよ。最初私達は辛くてお前を手離せないと思ったんだが、併し他人の為に生きるという事の方が、もっと偉大だからな。それをお前はしなさ。ならないのだ。決して生易しものじゃないだろう。併しお前には出来る。私達もお祈りをもって助けてあげよう。」

二日後私は出発しました。私達はこの世で二度と会う事は出来ませんでした。併し私はいつも父の祈りを身近に感ぜられます。又父が私の仕事に大変興味を持っていた事もわかります。「お前は何を教えているのか。どうやって教えているか。生徒達は熱心に勉強しているのか。生徒達は本に書いてあるように私達正しいのか。等々同じ様な質問がいつも手紙の中にありました。彼は日本の男兒達はドイツの子供達ほどすっと良いとさへ考えていました。「お前は一人息子だ。たのに私の国をツルツルにしてしまった。お前には何百という男兒がいるのにまだ髪の毛が大部残っているね。日本の子供はそんなに大人しいのか、それとも元気がないのかね。」と三年ばかり前の手紙に書いて来ました。彼は父私や父が母や妹にやったよう左側髪を伸ばす迄に少し時間がかかったのです。「眼鏡、礼儀、靴下前に勉強する事、寝室で割当てられた仕事を怠ける事を口やかましく言いました。私の親戚、友人、遊び仲間、小僧についていつも注意していました。使った金の明細をつけなければなりませんでした、いやになってしまう事も時々ありました。私の勉強についても実に厳格でした。「若い落第したら、お前は学校をやめて、炭鉱で働かなければならないんだよ」と通信簿が届った時は実に大きい怒鳴りが飛んでした。夜は決して、怠惰と我侭を許しませんでした。

このやかましい父の指導は若い私にとって時々は大変辛かったのです。勿論今ではそれが私にとって一番良い訓練であった事がよくわかります。その時でも、どんなになされている事を知っていました。父は自分があまりしたくないと思はせるという事はありませんでした。夕食後母●安楽椅子に坐らせ、父と私とでお祈を深くたり、台所をきれいにしたりしたものです。私達は一緒に坐を刈ったり、家の色々なものを修繕したりしました。仕事がすむと一緒に船や飛行機を作り、又待降節には クリスマスの馬小屋を作ったものです。目曜日にはいつも一緒に教会に行きました。母は私が幼い頃にお祈りを教えてくれました。父は祈り方を教えてくれました。「お前が祈り方を知らなければ、それは生き方を知らない事なのだ。」

二十年以上も前の事を、思い出すまゝに書いてみました。多分たいした思い出ではないかも知れません。父について、とりわけ取立てていう事がないように、思い出にも別に特筆する事はありません。併しこれらの思い出は私を力づけてくれます。父の別れの時の言葉は今迄私の耳に響いています。「天主様と共に行きなさい。そして何処に行っても、何であっても、良い仕事をしなさい」私は父の信頼を裏切らないように努めたいと思って居ります。

全國有名出版社發行
參考書豊富に陳列
島森書店
鎌倉駅前

レコードと電蓄は
逗子レコードショップ
交換と買入も致します
逗子駅前(湘南逗子駅並び)

論説　創立七周年を迎えて

新学年に入ってから早や二ケ月が、本学園にとって最も重要なことの一つである創立記念日はもう間近にせまっている。特に本年は開校七周年とあって、ラッキーな記念日を迎える事に対して、先輩方も及び、卒業生、在校生の諸君も昨年までとは違った特別な感慨を受ける事だろう。今学期開初に発行された〝栄光〟第十号の特集「開校当時を思う」はこれ等の点で非常に興味あるものであり、在校生の中には一人も開校当時を知る者が無いのであるから、当時の外面的な面影のほとんどが姿を消してしまったこの栄光の赤い坊の様子を紙面を通して見ることも又意義深い。

開校当時、それは終戦後間もない昭和二十二年頃である。たった数人の先生方と、百名に満たない中学一年生との協同生活が始り、大きな理想のもとに全員一丸となって荒廃しきった建物に立ち向った。その生活は大きな苦しみではあったが、その苦しみとは比較にならない程大きな喜びでもあった。実際この基礎の基礎をきづいた一期生、二期生の働きが今日の栄光〝外面的内面的に〟をもたらしたと云っても云い過ぎではないだろう。しかしこのような事はいづれもさきの特集に書かれていることであって、あらためて云う必要はない。それよりも重要な事は、それ等先輩の働きから「我々も負けずにやろう」とする意気を燃えたたせることだ。そして現在それは成る程度成功していると云い得る。特に部活動の点ではそれがめざましい。運動部の場合をみても、野球、卓球、バレーボール、陸上競技の部活動の点ではそれがめざましい。運動部の場合をみても、野球、卓球、バレーボール、陸上競技の部低調の部はあれ、昨年有数のチームとまで発展してきたものも少なくない。現に蹴球では優勝しているのである。もちろん、チーム力を向上させると云う事のみが目的ではないし、それだけが喜ぶべきことなのではない。それより寄せられた一期生、二期生の働きが今日の栄光〝外面的内面的に〟をもたらしたと云っても云い過ぎではないだろう。しかしこのような事はいづれもさきの特集に書かれていることであって、あらためて云う必要はない。それよりも重要な事は、それ等先輩の働きから「我々も負けずにやろう」とする意気を燃えたたせることだ。そして現在それは成る程度成功していると云い得る。特に

春季遠足行わる

昭和二十九年度春季遠足は五月二十六日全校一斉に行われ、今回も目的地を毎度かわらぬ近くの遠足用観光地にとり入学後初の旅に出た中一は、熊野九島、白水、青木、サバヤ、チコイ先生と玄岳へ。中二はヘルヴェクマヨネ先生他と三浦半島一周に。中三は本屋ウルフ先生他と昇仙峡へ。高一は山根、シュトルテン先生他と早雲山へ。高二は土屋、エイレンボス先生他と村山貯水池へ。高三は小山、堀内田、当真、金子、室北先生と荒崎へ出かけた。

翌日の二十七日、御見天の祝日は、ゆっくり休息した。

玄岳を登る中一生徒の後ろ姿は野崎先生

未曾有の大演芸会開かる

天狗サカダチして唄を歌うの巻【高一】

半佐美駅で伊東線を下りて、たずねに来雲山に向かい、平凡な田舎道をしばらく行ってのち、ハイキング・コースに入った。

この山には請れる人があまりないとみえ、道の両側には木イチゴがのんびりと黄色をはなち、五キロもの登り道を行く生徒の目と口とを、おおいになぐさめてくれたが、それも先頭を切っていったものだけの話。色つきのよい実は食欲旺盛な先輩諸君の腹におさまり、あとから来るものにはむしりとられたあとだけが残っているというすさまじさ。

木イチゴのなくなる頃から、それぞれのグループの談笑の声も段々少くなり、先を急ぐだけに力を使うようになる。

途中、道標のまちがいで、前方の者が道なき道を行進するという木イチゴを頂いたおれもあったが、どうやら休みもとらずに十時半から十一時半までの間に全員無事に到着、心配された吉田御老体も若いてますますさかんとばかりに元気に、登りきった。

一面若草におおわれた果雲山は伊豆半島の相模湾側にある五八〇メートルの山で、中一の登った玄岳をはじめ、西に箱根岡、東に三浦半島、遠くは房総半島まで一望のうちに見わたせる眺めのしごく上等で十国峠によく似た静かな山である。

頂上までの行程で全エネルギーを使いはたした生徒は、暫いた順に一休みしたのち、まわりの景色に見とれながら弁当にした。食欲も大半平らげてから、食後の運動にかかり、目頭側尼介をかけていた天狗さんとブルカ先生の御恩返しとばかりに、なわでゆわえつけた〝静かな男〟ばりにひっぱったり、ひきずったりという過足ならではの無礼講。

高校生になって急に大人になったかの如く、何に使おうというのか、すました顔で写真を写してもらう者、これはまた極を撮りまわして〝七人の侍〟まがいのチャンバラをする者、風に角食べることだけに熱中している者等々、休憩を楽しくすごしたのち、例によっての演芸会は東郷先生指揮下の全生徒の合唱による〝郭懐の唄〟〝ギガキギ〟で開会。

先生側からは、上気嫌の草野先生が中途半端唄をいくつか歌われ、天狗さんは、ドイツを去って丁度二年という記念日を祝って、すまして一曲、ハーモニカ合奏、「ハーモニカ合奏」、飛び入りの指揮長句等あったが、傑作は〝新栄光学園参入賦風曲〟と名付けられた一番で、先生と生徒がこの時だけはその資格を交換し、生徒側の稚いとこをつっついて、先生方は大喜び。

いつになく盛大な演芸会を終えて大キロの下り坂を一気にかけおり、半佐美海水浴場で休憩した後、帰宅の途についた。

——▼·▲——

六時間を、バスの中【高二】

高二は、二台の大型バスに乗り込んで、出動、登校でにぎわう道子駅前を、七時五十分に出発。

船橋へ出て、浦賀田浦で二十人ばかり乗せて追浜、金沢とコンダクトレスの十二分にていねいな案内に聞き入りながら進み、開国百年祭を開催中の横浜市内に入り、横須賀、工事中の道路のわきを走る。磯子では、美空ひばり嬢の新宅の紹介までとびこみ一回苦笑。

横浜駅前で、市内の生徒を四、五人拾い、京浜第二国道をマッシグラに進み、鶴見を経て、川崎に入り、国道をそれて、立川方面へと向う。左右には何も説明に値しない線なものばかりのため、コンダクトレスの発案で、マイクを車内にまわして、「歌の花どよみ」と称する演芸会を開催。

シャモサンが、十八番の「シャボン玉」を生徒の所望で始めれば菊地先生は「バイレーツ・ソング」を叫び、生徒もL·S·Tの歌曲や、その他諸々の歌をもって応じ、最後には、コンダクトレスも美声をはりあげて、数曲見事に歌って、拍手を浴びた。

やがて車は白い姿をかぶった富士の山麓を、熱海の町の中を列をくんで歩き出した。学校に行くとしたら、いまごろはどの辺を歩いているだろう等考えながら。

何回も通るきいた。先生も町の中の道はよくおぼえていらっしゃらないらしい。

やっと道がみつかった。「ここまで来れば、ぜったい道をまちがえないぞ。」と先生がおっしゃった。それもそのはず、一本道なのである。

坂まで坂。登り坂の連続である。だんだんと列がくずれてくる。朝心祝したとの疲り空も山のぼりには、ちょうどよい。

前方には、はげ山がいくつかかさなっている。玄岳はそれらの山のかげになって、見えないそうだ。

こんなに歩いてきたのにまだ見えないぞ。もっとがっかりした。坂道はつかれる。時々休むが、かえって休むとつかれやすい。

先頭は熊野先生、後部は青木先生である。

だんだんつかれる者がでてきひどく例がくずれてきた。

この二人の先生の間を、ぼくたちはあえぎながらのぼった。

とても楽しく、登りのつかれなどもうすっかり忘れてしまった。

見えるはずの富士山は、雲につつまれて見えない。残念だ。けれどもなんと雄大なながめだろう。

気持のよい山に心をのこして、帰ることになった。

乗宮駅についたのは、もうそろそろ夕方であった。

（中一A　）

玄岳で、初めての演芸会【中二】

八時前、熱海の町の中を列をくんで歩き出した。学校に行くとしたら、いまごろはどの辺を歩いているだろう等考えながら。

何回も通るきいた。先生も町の中の道はよくおぼえていらっしゃらないらしい。

やっと道がみつかった。「ここまで来れば、ぜったい道をまちがえないぞ。」と先生がおっしゃった。それもそのはず、一本道なのである。

坂まで坂。登り坂の連続である。だんだんと列がくずれてくる。朝心祝したとの疲り空も山のぼりには、ちょうどよい。

前方には、はげ山がいくつかかさなっている。玄岳はそれらの山のかげになって、見えないそうだ。

こんなに歩いてきたのにまだ見えないぞ。もっとがっかりした。坂道はつかれる。時々休むが、かえって休むとつかれやすい。

先頭は熊野先生、後部は青木先生である。

だんだんつかれる者がでてきひどく例がくずれてきた。

この二人の先生の間を、ぼくたちはあえぎながらのぼった。

とても楽しく、登りのつかれなどもうすっかり忘れてしまった。

見えるはずの富士山は、雲につつまれて見えない。残念だ。けれどもなんと雄大なながめだろう。

気持のよい山に心をのこして、帰ることになった。

乗宮駅についたのは、もうそろそろ夕方であった。

（中一A　）

溪谷に再度の水難【中三】

四時三十五分田浦発のイチバンのスカ線で横浜駅まで、そこから京浜線で東神奈川駅まで、次に横浜線で八王寺駅まで、今度は中央線で甲府駅まで、そこについたのが九時五十分。実に五時間の電車旅行で、睡眠不足に見えた顔も、どうにか意識を回復したようだが、疲労をさすって歩きたそうなおもも。

ところが歩いた様な気もしないうちに、おまちかねている山梨県光バス三台に分乗、拡声器から流れる案内ガール嬢の説明を耳に、晴天ですっかり干上った道路に垂い土煙をあげて、満員のバスは昇仙峡入口へと走る。

流れは甲州、ブドウ畠は沢山あるし、案内嬢の説明は、武田氏の在りしいくさと築城ばかり。

昇仙峡入口で、バス会社サービス?の記念写真を撮っていたとき、やっと流れに沿って徒歩開始。

流れをはさんで両側に絶壁が続き、その間を走る路を進む。

当日同伴の先生方は、組主任のウルフ、阿部、稲田、本屋の原先生と金城、ラッシュ、宇佐美、事務の大塩先生と八人の多勢。

流れは時々ほとばしりたって仙俄滝に到着。昼食のため四十分のお休みとなる。滝は大きくはないが勢よく落下する水が、白い飛沫を上げている。

のんびりくつろいでいる最中、突然「S君が滝に落ちこった——」という叫び声、折から先生方は一昨年同地への現高二の遠足の時の一生徒の水難の話をしておられたので、てっきり冗談と思われた様だったが、あまり騒ぎ方が激しいので、現場に行くと何と一生徒が、弁慶に足をさらわれ、ボストン・バッグ片手に浮きつ沈みつの光景、大分流されて、流れの落着いたところを、金城先生が、対岸の岩にまわって救助、皆の下務の大塩先生と八人の多勢。

昇仙峡の仙俄滝

あちこちに、長年風雨にさらされ、急流にたたかれて出来た人面石、天狗岩、登龍等の自然の芸術品をカメラのファインダーを通して鑑賞。

途中、何度も休憩し、そのたびに間食、そしてカメラいじりと、疲れを癒めて、荷せかえ、ラッシュ先生にかつがれて、下の宿屋へ辿着いた。

この事件で、相当時間をとったので、演芸会は中止となり、一応雨の上まで登り切って目的をはたして、もと来た道を下る。

帰りのバスで、案内嬢に、甲州弁の御相槌に感ずかったが、あまりにハンチクリンなので、覚えきれずにおわる。車内の放送演芸会もあまり花が咲かずしまい。

甲府十六時四十七分発の電車、横浜線、その他非常にすいており車内で大分はしゃぎまわった。

九時ごろ田浦着、解散した。

……△……△……▽……▽……

魚市場にて、サメを視察【中二】

横須賀駅前に全員集合した生徒は、予定より二十分程遅れて八時三十分頃、四台の大型バスに分乗して出発。

デコボコ道にゆられること一時間、浦賀の〝ペリー記念碑〟に到着、十五分の休憩をとる。

再び車の人となり、剣崎までの道を、口を動かすこと、案内嬢の説明を聞く事しみは進む途中で大型バスの通れない道に出会い、下車して剣崎まで一里余りの道を予定変更して、徒歩で行くことになる。

バス会社の不手際をボヤきながらも、山本先生の「あまり遠く歩くなよ、観歩会じゃないんだぜ。」の声も背に、元気に歩き走り、汗思い思いの行動をとる。

一時間半ばかりたって仙俄滝に到着。昼食のため四十分のお休みとなる。滝は大きくはないが勢よく落下する水が、白い飛沫を上げている。

のんびりくつろいでいる最中、突然「S君が滝に落ちこった——」という叫び声、折から先生方は、昨年同地への現高二の遠足の時の一生徒の水難の話をしておられたので、てっきり冗談と思われた様だったが、あまり騒ぎ方が激しいので、現場に行くと何と一生徒が、弁慶に足をさらわれ、ボストン・バッグ片手に浮きつ沈みつの光景、大分流されて、流れの落着いたところを、金城先生が、対岸の岩にまわって救助、皆の下務の大塩先生と八人の多勢。

珍妙、奇抜な福引に爆笑【高三】

高三の修学旅行を夏にひかえた春の遠足は、中津川渓谷になるといわれていたが、バスなどの関係から今度も三浦半島内の荒崎であった。

いままでの遠足にはかつてなかった程遅い九時四十分に衣笠駅集合。三組が貸切りとはいえども二台の京浜急行のバスにすしづめにつめこまれて二十分程もまれて荒崎へ、バスを降りて少し行くと海岸へ出る。その出たところの海岸はもう荒崎ぶし過ぎたところ。

後の方の遊歩道を一隊は荒崎の方へ行ったが引きかえし、荒井の海岸で昼食。昼食後十二時から恒例の演芸会が、あらかじめ各組から三名づつ選ばれた九名の名司会により開かれた。前もって用意されていた福引きが行われ、最近流行の〝プロレス〟菊池先生〝等なかなか新鮮なのが出る。中でも〝井上先生夫妻〟の初め、だだ甘〝いばりでサッカリン〟当真先生の講義〟は味があって骨がある。

からブタの骨、〝○○先生の講義〟は中味なしで玉砕というまで出る。及んだ。貧品授与の後、福引の券に番号のついて先生と先生と組んで、君、君のハーモニカ伴奏による三つの歌では小山先生組に当った〝姫荒節〟には小山先生は面を赤ら顔にされた。

展開、三つ全部歌えたのは一組もなかった。引き続き、君のジェスチャーまで入った流行歌の真似や、映画の俳名当てを行い〝静かなる男〟から〝君の名は〟までが出、正解者にはキャラメルが贈られた。

演芸会終了後、小山校師の手により写真を取り、但馬、長浜を経て、いままでの海岸はかりのところから、牛や豚がのんびり昼寝をしている田舎道を通り、予定の時間より早く場所を間違えて長井に出て、あわててバスを呼んでもらい、三時十五分頃、再びバスにもまれて衣笠駅に着き解散した。

——◇◎◇◎◇——

春の遠足

昭和二十九年度春季遠足は五月二十六日全校一斉に行われ、今回も目的地を毎度かわらぬ近くの遠足用観光地にとり入学後初の旅に出た中一は、熊野九島、白水、青木、サバヤ、チコイ先生と玄岳へ。中二はヘルヴェクマヨネ先生他と三浦半島一周に。中三は本屋ウルフ先生他と昇仙峡へ。高一は山根、シュトルテン先生他と早雲山へ。高二は土屋、エイレンボス先生他と村山貯水池へ。高三は小山、堀内田、当真、金子、室北先生と荒崎へ出かけた。

翌日の二十七日、御見天の祝日は、ゆっくり休息した。

玄岳を登る中一生徒の後ろ姿は野崎先生

未曾有の大演芸会開かる

天狗サカダチして唄を歌うの巻【高一】

半佐美駅で伊東線を下りて、たずねに来雲山に向かい、平凡な田舎道をしばらく行ってのち、ハイキング・コースに入った。

この山には請れる人があまりないとみえ、道の両側には木イチゴがのんびりと黄色をはなち、五キロもの登り道を行く生徒の目と口とを、おおいになぐさめてくれたが、それも先頭を切っていったものだけの話。色つきのよい実は食欲旺盛な先輩諸君の腹におさまり、あとから来るものにはむしりとられたあとだけが残っているというすさまじさ。

木イチゴのなくなる頃から、それぞれのグループの談笑の声も段々少くなり、先を急ぐだけに力を使うようになる。

途中、道標のまちがいで、前方の者が道なき道を行進するという木イチゴを頂いたおれもあったが、どうやら休みもとらずに十時半から十一時半までの間に全員無事に到着、心配された吉田御老体も若いてますますさかんとばかりに元気に、登りきった。

一面若草におおわれた果雲山は伊豆半島の相模湾側にある五八〇メートルの山で、中一の登った玄岳をはじめ、西に箱根岡、東に三浦半島、遠くは房総半島まで一望のうちに見わたせる眺めのしごく上等で十国峠によく似た静かな山である。

頂上までの行程で全エネルギーを使いはたした生徒は、暫いた順に一休みしたのち、まわりの景色に見とれながら弁当にした。食欲も大半平らげてから、食後の運動にかかり、目頭側尼介をかけていた天狗さんとブルカ先生の御恩返しとばかりに、なわでゆわえつけた〝静かな男〟ばりにひっぱったり、ひきずったりという過足ならではの無礼講。

高校生になって急に大人になったかの如く、何に使おうというのか、すましたの顔で写真を写してもらう者、これはまた極を撮りまわして〝七人の侍〟まがいのチャンバラをする者、風に角食べることだけに熱中している者等々、休憩を楽しくすごしたのち、例によっての演芸会は東郷先生指揮下の全生徒の合唱による〝郭懐の唄〟〝ギガキギ〟で開会。

先生側からは、上気嫌の草野先生が中途半端唄をいくつか歌われ、天狗さんは、ドイツを去って丁度二年という記念日を祝って、「ハーモニカ合奏」、飛び入りの指揮長句等あったが、傑作は〝新栄光学園参入賦風曲〟と名付けられた一番で、先生と生徒がこの時だけはその資格を交換し、生徒側の稚いとこをつっついて、先生方は大喜び。

いつになく盛大な演芸会を終えて大キロの下り坂を一気にかけおり、半佐美海水浴場で休憩した後、帰宅の途についた。

——▼·▲——

六時間を、バスの中【高二】

高二は、二台の大型バスに乗り込んで、出動、登校でにぎわう道子駅前を、七時五十分に出発。

船橋へ出て、浦賀田浦で二十人ばかり乗せて追浜、金沢とコンダクトレスの十二分にていねいな案内に聞き入りながら進み、開国百年祭を開催中の横浜市内に入り、横須賀、工事中の道路のわきを走る。磯子では、美空ひばり嬢の新宅の紹介までとびこみ一回苦笑。

横浜駅前で、市内の生徒を四、五人拾い、京浜第二国道をマッシグラに進み、鶴見を経て、川崎に入り、国道をそれて、立川方面へと向う。左右には何も説明に値しない線なものばかりのため、コンダクトレスの発案で、マイクを車内にまわして、「歌の花どよみ」と称する演芸会を開催。

シャモサンが、十八番の「シャボン玉」を生徒の所望で始めれば菊地先生は「バイレーツ・ソング」を叫び、生徒もL·S·Tの歌曲や、その他諸々の歌をもって応じ、最後には、コンダクトレスも美声をはりあげて、数曲見事に歌って、拍手を浴びた。

やがて車は白い姿をかぶった富士の山麓を、熱海の町の中を列をくんで歩き出した。学校に行くとしたら、いまごろはどの辺を歩いているだろう等考えながら。

何回も通るきいた。先生も町の中の道はよくおぼえていらっしゃらないらしい。

やっと道がみつかった。「ここまで来れば、ぜったい道をまちがえないぞ。」と先生がおっしゃった。それもそのはず、一本道なのである。

坂まで坂。登り坂の連続である。だんだんと列がくずれてくる。朝心祝したとの疲り空も山のぼりには、ちょうどよい。

前方には、はげ山がいくつかかさなっている。玄岳はそれらの山のかげになって、見えないそうだ。

こんなに歩いてきたのにまだ見えないぞ。もっとがっかりした。坂道はつかれる。時々休むが、かえって休むとつかれやすい。

先頭は熊野先生、後部は青木先生である。

だんだんつかれる者がでてきひどく例がくずれてきた。

この二人の先生の間を、ぼくたちはあえぎながらのぼった。

とても楽しく、登りのつかれなどもうすっかり忘れてしまった。

見えるはずの富士山は、雲につつまれて見えない。残念だ。けれどもなんと雄大なながめだろう。

気持のよい山に心をのこして、帰ることになった。

乗宮駅についたのは、もうそろそろ夕方であった。

（中一A　）

溪谷に再度の水難【中三】

四時三十五分田浦発のイチバンのスカ線で横浜駅まで、そこから京浜線で東神奈川駅まで、次に横浜線で八王寺駅まで、今度は中央線で甲府駅まで、そこについたのが九時五十分。実に五時間の電車旅行で、睡眠不足に見えた顔も、どうにか意識を回復したようだが、疲労をさすって歩きたそうなおもも。

ところが歩いた様な気もしないうちに、おまちかねている山梨県光バス三台に分乗、拡声器から流れる案内ガール嬢の説明を耳に、晴天ですっかり干上った道路に垂い土煙をあげて、満員のバスは昇仙峡入口へと走る。

流れは甲州、ブドウ畠は沢山あるし、案内嬢の説明は、武田氏の在りしいくさと築城ばかり。

昇仙峡入口で、バス会社サービス?の記念写真を撮っていたとき、やっと流れに沿って徒歩開始。

流れをはさんで両側に絶壁が続き、その間を走る路を進む。

当日同伴の先生方は、組主任のウルフ、阿部、稲田、本屋の原先生と金城、ラッシュ、宇佐美、事務の大塩先生と八人の多勢。

昇仙峡の仙俄滝

魚市場にて、サメを視察【中二】

横須賀駅前に全員集合した生徒は、予定より二十分程遅れて八時三十分頃、四台の大型バスに分乗して出発。

デコボコ道にゆられること一時間、浦賀の〝ペリー記念碑〟に到着、十五分の休憩をとる。

再び車の人となり、剣崎までの道を、口を動かすこと、案内嬢の説明を聞く事しみは進む途中で大型バスの通れない道に出会い、下車して剣崎まで一里余りの道を予定変更して、徒歩で行くことになる。

バス会社の不手際をボヤきながらも、山本先生の「あまり遠く歩くなよ、観歩会じゃないんだぜ。」の声も背に、元気に歩き走り、汗思い思いの行動をとる。

一時間半ばかりたって仙俄滝に到着。昼食のため四十分のお休みとなる。滝は大きくはないが勢よく落下する水が、白い飛沫を上げている。

のんびりくつろいでいる最中、突然「S君が滝に落ちこった——」という叫び声、折から先生方は、昨年同地への現高二の遠足の時の一生徒の水難の話をしておられたので、てっきり冗談と思われた様だったが、あまり騒ぎ方が激しいので、現場に行くと何と一生徒が、弁慶に足をさらわれ、ボストン・バッグ片手に浮きつ沈みつの光景、大分流されて、流れの落着いたところを、金城先生が、対岸の岩にまわって救助、皆の下務の大塩先生と八人の多勢。

珍妙、奇抜な福引に爆笑【高三】

高三の修学旅行を夏にひかえた春の遠足は、中津川渓谷になるといわれていたが、バスなどの関係から今度も三浦半島内の荒崎であった。

いままでの遠足にはかつてなかった程遅い九時四十分に衣笠駅集合。三組が貸切りとはいえども二台の京浜急行のバスにすしづめにつめこまれて二十分程もまれて荒崎へ、バスを降りて少し行くと海岸へ出る。その出たところの海岸はもう荒崎ぶし過ぎたところ。

後の方の遊歩道を一隊は荒崎の方へ行ったが引きかえし、荒井の海岸で昼食。昼食後十二時から恒例の演芸会が、あらかじめ各組から三名づつ選ばれた九名の名司会により開かれた。前もって用意されていた福引きが行われ、最近流行の〝プロレス〟菊池先生〝等なかなか新鮮なのが出る。中でも〝井上先生夫妻〟の初め、だだ甘〝いばりでサッカリン〟当真先生の講義〟は味があって骨がある。

からブタの骨、〝○○先生の講義〟は中味なしで玉砕というまで出る及んだ。貧品授与の後、福引の券に番号のついて先生と先生と組んで、君、君のハーモニカ伴奏による三つの歌では小山先生組に当った〝姫荒節〟には小山先生は面を赤ら顔にされた。

展開、三つ全部歌えたのは一組もなかった。引き続き、君のジェスチャーまで入った流行歌の真似や、映画の俳名当てを行い〝静かなる男〟から〝君の名は〟までが出、正解者にはキャラメルが贈られた。

演芸会終了後、小山校師の手により写真を取り、但馬、長浜を経て、いままでの海岸はかりのところから、牛や豚がのんびり昼寝をしている田舎道を通り、予定の時間より早く場所を間違えて長井に出て、あわててバスを呼んでもらい、三時十五分頃、再びバスにもまれて衣笠駅に着き解散した。

——◇◎◇◎◇——

にぬれた体を潮風にふかれながら逃んだ。

思ったよりも早く剣崎に到着、お年のお加減でか、一番しがりをつとめられた猫藤先生の指令のあと、待望の弁当をとった。緑台内の見学が出来ず、みな残念がうだったが、写真をとったり、海辺におりたりして一時間半余り遊んだ後、再び徒歩で三崎へと出発した。三里あまりの山道を二時間程、森本先生を先頭に進み、三崎町に入った。

時間の都合で城ヶ島へわたるのは中止となり、先まわりをして待っていてくれたバスに乗って、酒屋の中心、町営の魚市場へと乗り込み、放射能を気にしながら、頭をならべて横たわっているマグロならぬサメを視察した。

市場前から再び車の人となり、油壺に向い、東大三崎水産試験所の水族館を見学、大きな亀や珍魚怪魚と二十分ばかり面会したあと次は荒崎へと向った。

岩のごつごつとした海岸で、しばらくの休憩の後、会歌に移った。吉野、鈴木両先生の合唱、ヘルヴェク先生の姓名オリコミ作文、吉野先生の独唱等に楽しんだのち、榎歌を斉唱し、記念撮影もすませて、最後の行軍、逗子へと出発した。

バス中でマイクを借用して、演芸会を開き、歌や物真似に興じつつ、陽のまさに沈まんとする葉山海岸に御用邸前で別れをつげ、ネオンの美しくつき始めた逗子の街につき、解散となった。

甲府十六時四十七分発の電車、横浜線、その他非常にすいており車内で大分はしゃぎまわった。

九時ごろ田浦着、解散した。

……△……△……▽……▽……

神奈川硬庭選手権大会

高校單・複とも優勝

單　複六　組

四月二十四日から十日間、横浜山手コートで行われた神奈川県庭球選手権大会高校の部に本校庭球部（硬式）から有　　、　　、　　、　　、　　の六名が出場したが、見事共に優勝すると云う快事を成遂げた。

・決勝試合経過

シングルス　第一シード　は同じクラブの　第四シードと対戦したが強風の為万の実力は十分に発揮されず月戦に終始した。第一セットすべり出し良く5—2とリードしたが、風が強くなると共に攻撃されたりやら6—4で逃げる。併し第二セットは完全に風に飲まれ展る試合は中断、興味は半減した。結局4—6で取られファイナルに持込む。第三セットの終盤でそのまゝずるずると相手に巻込まれ3—5と絶対の窮地に追込まれたが、次のサーブを良くキープし、よりやく追まりかけた風にもくずされたペースを無理に変え、一球一球を慎重に打ちその間マッチポイントを一つも許さずに4ゲームを連取、遂に逆戦苦闘一時間余で逆転を得た。

ダブルス　これも第一シード　は簡手知った　、　、　組と対戦したが、風に悩まり　、　の日頃のコンビ良く、単優勝の気の強みも手伝って調子良く、何となくチームワークのきこちない相手方を徹底的にかきまわし、これは圧勝した。第一セットは第一ゲームを落としただけで、素早くネットを取れば左に切れ味のあるショートを決め、相手が出て来れば口ビングとパッシングでこれを攻め完全に試合の主導権を握り簡単に6ゲームを連取した。

写真は　君

喜びの　君談

幸にして、単、複共に優勝する事が出来ました。今回のトーナメントは、土、日、祭日のみに行われ、又場所も横浜のコートで行われたので、時間的にも、地理的にも、十分な余裕を持つ事が出来、十分実力を発揮出来る事常にられしかった。一、二回戦は何なく勝つ事が出来たがそれ以後は、全く幸運によって勝つ事が出来たようなものであった。このトーナメントで、最も嬉く感じさせられたことは、どんなにコートのコンディションが悪くても、又、風、雨等の妨害、又は自分の相手の調度が悪かったとしても、あくまでも冷静に、まじめに、真剣にプレーする事が出来なくては、駄ず敗けるということであった。実際、僕も気を引き締めて試合をするために、非常に苦労した。第二セット初め二ゲームの間をつけられ何となくゲームを失ったが、ペースを変え、いきり立つ相手を抑え好調に6—4と相手を降しストレート勝ちを得、単複の優勝を二手に収めた。（H）

今後もみっちり練習し、技、精神共に立派なプレヤーになりたいと思う。

—◇・◇—

準決勝・小田原に惜敗

関東高校サッカー県予選

国体高校サッカー県予選は五月十五日より十七校が参加して熱戦を繰りひろげたが、惜しがら優勝の期待をもたれて出場した本校蹴球部は順調に勝ち進み遂決勝に昨秋の県並びに南関東選手権者、小田原高と対戦、接戦したが我がFWは小田原のそれに圧に及ばず1—0で惜敗した。

栄光学園4（2—2、2—1）3緑ケ丘高
栄光学園1（0—0、1—0）0　Y校
栄光学園6（2—1、4—0）1関東学院
準々決勝
小田原高1（1—0、0—0）0栄光学園
準決勝

WIFIWHHHBBK
LLCRFLCRLRG

観戦記

五月十六日。第三回戦。対Y校（於川崎高校）

ハーフ・タイム。スコアは0—0。試合は予想外に進んだ。しかし、未だみんな、緊張がどこかぼぐれぬまゝ後半に入る。

前半にも増して素晴しいスピードだ。　のダッシュ、　及び攻撃に参加したFBのキックそれにつぶしも鋭い。ハーフの強い栄光は中盤戦の強みからジリジリ押して行った。相手の「優勝候補」にも負けが現われる。両軍の激しいアタックで白熱戦となる。ポイントは時間の問題となった。

意外に風がかゝった。（ポインドが決まらねば抽選なのだ）観入校相はやゝ特にキックに劣るが、こちらには先日の疲れも見せずファイトがあり、それにチーム・ワークが非常によい。

23分、Y校に隙が出来た。Y校ゴール前、第一波攻撃の失敗して少しもどった球を　、逆サイドのウイングに送り、　きれいにヘッドでセンタリングしたのを　、　のダッシュよく、　がゴールを決める。

準決勝。対小田原高校。（於保土ケ谷球場）

、準々決勝の対関東戦は、予想通り6—2、1—4、0—1で勝負みゝ、やはり予想通り強豪相手を撃破の末敗った小田原と対戦する事になった。

いよいよ十時、両チーム夫々ポジションにつくと風辺にさっと緊張が漲る。こちらは去年二位だったY校を敗った上昇期にあるチームである。相手は昨秋の県並びに南関東選手権者、メンバーを見るとFW・LH他さして変っていない。「神さま」（我部のC級時代、その校に敬服して附けた綽名）は来ないが、がこちらも自信はある。GK　もまだ貫禄とそないが、技術は素晴しい。それにハーフには特に強みがある。

—来がキック・オフにはならない。おやと思ってレフェリーを見ると短笛にならないのだ、彼さかんに時計を睨んでいる——皆んな驚いた。気が抜けれた。

十四時〇分栄光キック・オフ瞬間に全員動き出しスピードが加速度的に増す。　のロング・パスに対しショート・パスで攻撃するさすがに今までたい熱戦で攻撃の波はゆるやかに変化しているがどちらも決め手にならず、一瞬緊張気がゆるんだ瞬間を見逃さず前半七分。敵がハーフを抜いてLWへ球を送り絶にLIへとパスされ絶にCF、完全にフリーマーク。栄光危し。縋むは　GK一人。しかしあの広いゴールは、一人では守り切れず　に一点を取られる。

先取されたのは悔かったが名誉の戦いぶりなら大丈夫と思われた。小田原は主にLI球を集中して攻め球をパーにぶつけるなどピンチは二、三あったが、いずれもバックス陣の好守に阻まれた。こちらは縦パスを多く出したが、球の持ち過ぎ、ゴール前の処理がまずく、それにバックスの固い守りに苦んでマークされ抜群のチャンスも逃してしまった。只、二十分過RW—RIの球を、RIシュートしたが惜しくもポストに当ってしまいハーフ・タイムとなる。

後半。いつも後半は体力的にまいるので心配されたが、意外に強しい反撃が始まり中盤戦にこちらが押さえ特にダッシュの鋭さは勝っていた。ダッシュのよいのは貫禄がいい。例の縦パスが相手のハーフを抜いて「神さま」とRW　の猛烈なダッシュの競争となった。これに勝てば、手ポイント出来る。が「神さま」の方が一見早く球を取った。　止まろうと努力したがそのまゝ神様にとしーんとぶつかった。が何ろの神さまは六尺近い大男、見事にはね返った。両方とも白い歯をむき出して笑いながら謝った。

再び熱戦が始った。決め手のないまゝ、時間が過ぎて行った。一回OKのドリブルの球を　ったが、惜しくもものに出来なかった。

後一点入れば準決勝からは延長があるので、最後の一分迄反撃を続けたが時間は容赦なくホイッスルが鳴った。（1）

紀の夢

今日この頃の土曜の午後などのグランドの有様は、二年前とくらべてみるとどうでしょう。私がきたての頃、だれだって体を動かさずにはいられない位に晴れあがった空なのに人影一つないグランドをみて、正直なところ心のうちで、これはまあなぜ学校だと思ったことを覚えています。それを思うと、野球・排球・陸上とさっしりつまったグランドの盛況さに各部とも本当によく成長したものだと驚きるばかりです。

私淑バレー部の成長も余り同様です。運動神経が一寸ばかり鈍かったので、歩くことは外におよそ縁の遠かった私が、一期生の諸君に、先生のような若い方がなどとおだてられ、つい部長になってしまいましたが、その後、部の形も整って行き、中学の二チームができ、間もなく横須賀地区の対校試合にも出場するようになり、準優勝をおさめるなどの目ざましい活躍ぶりを示す程に成長しました。これは全くコーチをして下さる窪北先生及び除幕君を中心として部の結成につくしてくれた二期生諸君のおかげです。

今後の部に望むことは沢山ありますが、中でも弱く感じるのは、固い団結力です。バレー部は実に　ワキアイ

アイ　として本当に愉快なのですが、うっかりするとなれすぎて、その「アイアイ」さが「アイアイ」さになる恐れがあるように思われます。バレーが団体競技であり、チームワークの必要なと説くまでのこともないと思いますが、団体競技である以上、前衛だけでも、後衛だけでも試合はできない筈です。各自が自己の持場を守り、しかも一チームとして動くこと。これがどうもうちのチームは不しいようです。とくにこれは、試合の時よりも練習の時にあらわれています。前陣は、自分の練習が終れば休んでしまう。後衛は前衛の練習の時だけうったっている。または自己の持場以外のことをやろうとする。これではいざ試合という時に、チームワークなぞ発揮できるわけはありません。とくにうちは、他校にくらべて練習量が不足し勝ちなのですから、練習の時に、余程協力し、頭を使って一生懸命にならなければおいついていけないでしょう。

ですから今後との練習量の不足を力バーするための能率的練習方法を考えていきたいと思います。それからもう一つ、それは今のことと関係のあることですが、部員の積極的自主的な活動を行うようにすることです。

これも部なのですからあたり前のことですが、とくにキャプテンを中心として団結し、自主的な行動をとってもらいたいと思います。そのためお互いに部の運営についてよく話し合い、しかも練習についてのキャプチンの言葉には従うことです。先生にいろいろいわれなければ、先生が見ていなければ、ほ部の活動を忘れるなどということが万一あるとしたらすい分奇妙な話です。栄光校は自主的活動に乏しいなどという批判は、部活動によって是非克服してもらいたいものです。

おゝおゝ、どうやらこれでは夢ではなくて、居眠まどりのお小言になってしまいましたね。

とも角も、晴れあがった青空の下で、力一はいスポーツをするのは本当に楽しいものです。そして私の経験からするなら ば、学校生活のもっとも美しい思い出は、熱心にやってきた部生活のことです。

それにつけても、私淑のあの戦争中の学校生活、運動に値うべきボールもなく、あるものは敵機か武器ばかりだった。あの頃が思い出されます。それにひきかえ、自分の好むスポーツを、腹の減ることを心配することなく思う存分することのできる、この平和な世の諸君を本当に美しくうらやましく感じます。そして再びあのような時代がきませんようにと私は心祈かに祈ります。余世界の若人達が本当に愉快にスポーツに興じること。これが私の一番大きな夢かもしれません。

（能登は社会科教諭・排球部部長）

【バスケット】

宿敵坂中に届す

前半のリード空し

県下中学校バスケット選手権大会は五月二十二日から湘南高校コートで行われ準戦したが、準々決勝で宿敵坂本中と顔を合わせ前半のリードも空しく、後半完全に抑へられ惜敗した。なお優勝校は坂中であった。

第一試合　五月二十二日
栄光25—14大磯中
第二試合　二十三日
栄光42—12鶴沼
準々決勝　五月二十九日

【軟　庭】

三浦・鎌倉学園に快勝

△五月十五日軟式テニス部は、本校コートに於て三浦高との試合を行い、七対一で快勝した。試合は一時間余り、多くの生徒の応援を受け、一組の黒星を印したのみで完全に勝利をものにした。出場チームは　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　、　で三浦のテニス部を圧倒した。勝因はコートに慣れているためと、多数の応援を受けて伸々と試合をした事である。

△試合後には高校部員全員出場の親善試合を行った。

△二十九日には同コートで対鎌倉学園との試合を行った。わが校は相手の逃球におされながらも相手の失敗をつけこんでよくポイントをおさえ逆ぜ切った。なお当日は試合開始が遅かったため、親善試合は中止となった。

【卓　球】

高校選手権予選

団体・個人ともに苦杯

創設以来初めて正式のコーチを迎えて、はりきる卓球部は五月十五、六の両日横浜商業学院体育館で行われた関東高校選手権予選に出場した。

団体では一回戦で神奈川県立川崎高校と顔合わし、奮闘むなしく3—0で敗れ二回戦への出場資格を失い、個人でも二回戦に勝ち進んだ　　、　　組（敗）とも二回戦で惜しくも敗れ去った。

団体

川崎県立高校3—0栄光学園
川崎　2—0
川崎　2—1
〔不戦勝〕

個人

ダブルス
慶応　2—1
平塚　2—0
〔不戦勝〕
Y校　2—0
シングルス
　　2—1平塚農業
小田原2—1

厚木2—1
小田原2—0
磯　2—0
平塚2—0

市内排球大会

中学予選で敗退

五月二日、今年最初の大会が有りわが栄光中学バレー部もこれに参加した。この空は晴れてたが風が強く特に西に近い馬堀中学は一段と風が強い様に感ぜられサーブを武器とする栄光は始めから苦戦した。

栄光は浦賀、馬堀、坂本と共にAグループで、田浦、野比、不入がBグループのリーグ・トーナメントを行なった。

栄光対坂本が第一試合で始まった。

栄光2（21—12、21—18）0坂本
浦賀2（21—5、21—10）0栄光
馬堀2（21—18、21—15）0栄光

これは良い試合になると思ったが粘りのない栄光は後半ひきはなされた。それにしてもバックの弱い事はっきりわかる結果栄光の試合ぶりだった。

【山　岳　部】

雨に見舞われた沢登り

五月二日、三日の連休を利用して、山岳部員は特別参加のブルカ金子両先生、OB　君を迎えて学年ごとに丹沢の沢登りを行った。

二日目二日は、抽七沢に入って塔ケ峰を経て札掛に向い、高一は新芽の沢に入り中二は四ツ沢に入って高尾山に出、高一と合流して札掛に向う予定だったが、高一で途中ちょっとした事故が起り、相当時間が遅れたため、中三は高尾根を経て、下山する予定の金子先生と部員十四名を残して札掛に向い、高一は一時間程遅れて、札掛に向い、すっかり高一と中三のお世話になってしまった。翌三日は朝から天気がくずれそうだったため、コースが変更され、中三は奥さんをリーダーとしてオバケ沢に、高一、二は瀬川君をリーダーとしてキウハ沢に向ったが、沢に入って間もなく、雨が降り出したため仕方なく、札掛にもどり、少し休憩した後、土砂降りの雨の中を資毛を経て下下山、十時半頃帰宅した。（M）